

恐怖の記憶に潜む魂の輪郭

論文内容の要旨

東京藝術大学大学院美術研究科  
博士後期課程美術専攻油画研究領域（油画技法材料）  
学生番号 1320908  
穆繼聡

はじめに

人類は魂に対する探求を止めたことがなく、「魂」が本当に存在するかどうかを論証するために、様々な方法を試みてきた。多くの人にとって、「魂」とは神秘的な概念であり、民間伝説の中でしか存在しないものであり、現実には存在しないものであると見なされている。

私が特に着目するのはそのような「魂」の存在と、鬼・怪奇のイメージの関係についてである。科学にとって「鬼」は迷信的なものであり、科学の諸法則に合致していない。しかし一方でどのような文化においても、妖鬼や妖怪の存在は古くから信じられてきたとも言える。「鬼」は実在するのだろうか。仮に「鬼」の存在が将来的に証明された場合、それはどのような形で現実の生活に現れるのだろうか。本論では、私自身の幼少期の不思議な出来事を出発点とし、民間の神話や伝説における「魂」の輪郭を探る。

私は幼い頃から、虚構と現実の間を行き来し、「魂」の姿を幻想し続ける性質が自然に身に付いていた。毎日毎日、「魂」の姿がドラマやアニメで表現されるように残虐で獣的で目をそらせるような表情をしているのか、などと考えてきた。昼間は昼間でそれらについて考え、夜になるとそれらは夢に出てきて美しい夢の空間を奪うというように、「魂」への接近によってもたらされる白昼夢や悪夢に侵されることがよくあった。それらの想像と現実とが生み出したものに長期間悩まされた結果、恐怖心が形成され身体の一部となり、潜在的に支配されるようになった。

本論では、民間文化における魂の存在とそれがもたらす恐怖の生成について理解する一方で、作者の心理・身体・芸術創作に対する潜在的な影響についても説明する。個人的な記憶に基づく民間文化は、私が考える靈魂の奥深くに薄れにくい恐怖をもたらし、それに対する記憶は逃避し、逆に支配されている。音や暴力、支配に関する記憶に対して、私は常に淡化しようと試みているが、自身の絵画創作においては、記憶がもたらす潜在的な影響から逃れることはできない。これらの不快な記憶は、紙上に記録される媒介として存在し、潜在的な意識の中に幼少期の経験を形作るように、記憶と絵画の形式を融合させる。これが恐怖の記憶が淡化しない重要な原因でもある。同時に、記憶が深まるもう一つの原因は、記憶の選択性にある。つまり心理的な作用により、これらの記憶がもたらす緊張と刺激を常に振り返っている。

魂とは一体どんなものなのか。本論で私は恐怖の記憶に潜む魂の輪郭を描写することはできるのかという問いについても論じる。私が幼少期に都市と農村部落の間で生活した原初経験のようなものは、そこに民間文化や風習が存在するかどうかにかかわらず、人間の身体と靈魂を束縛すると考える。これらの不快な記憶に対して抵抗しているように見えるものの、実際にはそれらの影響に依存しているのである。

私の絵画作品は、不条理で不安定な生活を偽の世界で垣間見ることに重点を置いており、これらの不快な記憶を伝えるだけでなく、自分自身が面白い靈魂を形成できることを望ん

でいる。

したがって、第1章から第3章までは、様々な角度から例を挙げながら説明を行う。

本論は以下の三つの章から構成されている。

第1章では、一方で中国古代の民間に生じた怪談（鬼）の文化を例に挙げ、一方では私自身の体験を通じて村落に伝わる鬼や怪物のイメージの変化の過程、それらが人の心理や創作方法に与える影響について論じる。私の幼少期の生活と伝承との関係を探究することを通じて、鬼の気配や幻影の原始性と多様性を認識する。これは私自身の生活と創作に重要な役割を果たしている。ユングが提唱した「集合的無意識」と鬼神話との関連性を深く分析し、筆者と鄔建安の作品を例に挙げて、集合的無意識と絵画の神秘的な関係について探究する。

第2章では、身体的感覚特に触覚を中心に据えて、民間文化虚構の物体について考察し、身の回りに存在するものや見えないものに対して、知覚を使って詳細に議論する方法について論じる。また民間における音・像・光を駆使した伝承や習俗が私の身体に影響を与え、無意識に夢遊病になることがあることを実例として述べる。ここでいう身体とは、「無器官の身体」であり、身体の領域を切り離し、器官を無力化し、エネルギーを流動させることができる身体を指す。

第3章では、私自身が民間文化（民間療法文化と宗教）の奇妙な部分に対して持つ疑問を挙げ、民間療法文化はそんなに不思議なものなのだろうか？なぜ人々は信じられたのだろうか？民間療法文化と宗教が心理的影響により、悪い記憶が徐々に強く固化される様子を例示する。

私の絵画創作は、文化的記憶が提供する歴史的事件や物語の模範を利用している。文化的記憶とは、特有の文化伝統を記憶として記録する方法を指す。我々は、消えることのない記憶や伝統的な文化的記憶を、イメージで物語る方法を選び、イメージの媒介を使用して記憶を保存している。イメージ記憶は、人々の感情エネルギーを保存するだけでなく、個人のアイデンティティと民間文化、そしてその宗教との対峙の物語を、見る者に感じてもらいたい。その中の文化や宗教は象徴的な抵抗である。

また本章では、私が恐怖的な記憶から創作をする理由や、創作活動において民間文化記憶からインスピレーションを得る方法、そして、なぜ画集を使用して描くのかを説明する。これらの絵画は観衆に潜在的な娯楽性を提供している。

## 目次

### はじめに

#### 第1章 潜在的な魂の輪郭のイメージ

##### 第1節 遺伝子に刻まれた潜在意識

隠されたもの

身近な信仰と霊物

##### 第2節 物語のイメージ

民話の創造性

異文の開放性

志怪小説の変遷

##### 第3節 鬼神のイメージ

祭祀の鬼神

「人」の輪郭を描くことの難しさ

##### 第4節 『虫落』の間

仮面

#### 第2章 神秘的な感覚

##### 第1節 幻の現実世界

夢の中に現れる幻

夢の誤認

窮境

幻想

##### 第2節 霊媒（異界との往来）

魂と護身符

知覚と予言

無意識に書く

神秘的靈感

通霊の神婆

混沌たる線-落書き帳

秩序ある線

##### 第3節 身体知覚

創造物

身体と万物

筆者の身体（筆者の身体を出発点とする）

身体と動物

不完全な体

センサー

心の相互作用

神話と機械（博士審査提出作品『純真に回帰する-機械風箱』）

### 第3章 恐怖と戦争後の記憶

#### 第1節 消し難い記憶

記憶画像

文化的記憶

文化的記憶が生む恐怖心

現代恐怖の記憶

文化的な抵抗—忍耐

#### 第2節 塵埃記録(戦争後の街の記憶)

歴史の塵埃

都市の外れ

廃墟の遊園地

塵埃地帯

塵埃の収集者

廃墟の詩人

#### 第3節 複製イメージ

本の中の図しか読まない

機械式複製絵画

アイコンと文字（アイコンを世界中に複製する）

線と複製